

## 「若冲晩年期の様式に関する一考察 - 西福寺の襖絵を中心に - 」

福士雄也（静岡県立美術館）

西福寺（大阪府豊中市）蔵の 仙人掌群鶏図 は、伊藤若冲（1716～1800）の遺作中唯一の総金地作であり、裏面に描かれていた 蓮池図（現在は軸装）とともに、晩年期の大作として知られる。

これら西福寺の襖絵の重要性は、作品としての完成度の高さだけにあるのではない。動植綵絵の制作完了後、安永～天明年間、若冲におけるいわば空白の時期である。この時期、若冲は以前に比べその作例が極端に少なくなり、またその他の動向についても資料に乏しく不明瞭な部分が多い。西福寺の襖絵は、この空白の時期を経て制作された最初の作品であり、以後再び活発となる若冲の制作活動の再出発点として位置づけられる点が大いに注目されるのである。

そして、西福寺の襖絵をそれまでの作品群と比較したとき、そこには大きな画風上の変化がみられる。とくに、若冲がその画歴の初期から描き続けてきた鶏の描写は、佐藤康宏氏が指摘するように、水墨画における筆勢を着色画にそのまま用いたような折衷スタイルによっており、動植綵絵などでみられたような緻密な描写とは明らかに異なっている。これを以て若冲における鶏画の一つの到達点とする佐藤氏の見解は、妥当なものといえるだろう。

しかし、西福寺の襖絵は、その後制作される晩年期作に多く共通する様式的特徴を孕んでいるという意味で、晩年期の様式を決定づけた作品としても捉えうる。具体的には、鶏の形態、画面構成などがその様式的特徴の中心となるが、それはつまりこうした要素が晩年期以降定型化され繰り返し用いられていることを意味する。それを明らかにすることは、若冲自身の制作活動のありようを理解する上で重要であるだけでなく、今後若冲とその周辺画家の問題を考える手掛かりにもなるだろう。

鶏の形態が定型化の傾向を強く示すようになるのは晩年期になってからだが、一方で、その基本的な形はすでに早い時期から確立されている。この鶏の基本形態については、すでに佐藤氏が詳細な分類を行っているが、その発想源として、発表者は近年他の若冲画において指摘される版本類の学習に加え、中国絵画における鶴図からの図像の利用を想定する。吉祥モチーフとしてさかんに描かれる鶴に通例の姿態を鶏に利用することによって、若冲は鶏により高貴なイメージを重ね合わせようとしていたのではないだろうか。図像の転用が単なるかたちの利用にとどまらず、モチーフに意味内容を付与するものであることは、近世初期における特徴の一つとして知られるところであるが、この伝統が18世紀にいたってもなお生き続けていると考えられるのである。

以上、若冲晩年期作の様式的特徴と、鶏の姿態における中国絵画からの影響について、西福寺の襖絵を中心にしながら考察する。制作依頼主とされる吉野家と若冲の関係については新たな資料はないが、西福寺の持仏堂が調査された成果をふまえ、制作依頼の背景についても若干の私見を述べたい。